



ARIMASS Letter

[Association for Risk Management System Studies]

危機管理システム研究学会 2011年6月 第45号

H P <http://www5b.biglobe.ne.jp/~arimass/>

就任の挨拶

会長 内田 英二（昭和大学）

この度、長濱昭夫会長の後を受け、会長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

私はメディカルリスクマネジメント（MRM）分科会に所属していますが、医療安全の確保を目的として他業種の危機管理を学ぶために本学会に入会しました。1999年の横浜市立大学附属病院での患者取り違い事件を契機に、日本社会の医療を見る目は急速に変化しました。この事件は、心臓を手術する予定の患者さんが肺を手術され、肺を手術する予定の患者さんが心臓を手術されたものでした。医療はその専門性から一般の人が入り込めない聖域と考えられていましたが、医療安全対策と医療事故への適切な対応を目に見える形で社会に提示していく必要がでてきました。

本学会の設立理念は、「広く多くの人との尊敬と友情とひとり一人の存在感を基本とした情報交換、研究成果の共有、教育活動の推進等を通じてその成果を社会に還元する学会とする」ことにあります。本学会の特徴は、製造・流通・サービス・金融・保険をはじめあらゆる業種や分野から、弁護士・公認会計士・税理士・監査人・弁理士・技術士・社会保険労務士・医師・研究者・学生、等が参加しているところにあります。専門性を追求すると同時にそのプロセス・成果を多くの業種で共有できる環境は他の学会にはありません。本学会には5つの分科会がありますので、会員の皆様にはぜひ積極的に参加していただけるようお願い申し上げます。

東日本大震災による福島第一原発の事故に関しては、学会として「リスクに強い社会的基盤の構築」を目的として、経済産業省・原子力保安院・東京電力に対し本件調査への参加を要請しました。我が学会の強みを発揮して社会貢献につながるような活動を会員の皆様と共に目指して行きたいと思っております。（次ページへ続く）

	目	次	
巻頭言	1	分科会報告	6
2010年度会員総会報告	2	学会員の学位・論文・新刊書のご紹介	11
リスク随筆	4	編集後記・事務局からのお知らせ	12

長濱会長から引き継いだ本年度の重点目標である 3 点を継続します：1．会員増を目指します、2．学会としての学術的な地位の向上を目指します、3．多くの会員が参加できるプロジェクトの充実を目指します。これらに加え、広報活動の充実と規約の整備を図りたいと思います。

本学会は 2000 年に設立されましたので既に 11 年が経過しました。これからの 10 年間でさらに実りあるものとしていくために、会員の皆様のご協力をあらためてお願い申し上げます。雑感となりましたが、就任のご挨拶とさせていただきます。

2010（平成 22 年）年度会員総会報告

議案

- 1) 2010 年（平成 22 年）度活動報告
- 2) 2010 年（平成 22 年）度収支決算報告
- 3) 監査報告
- 4) 2011 年（平成 23 年）度活動計画（案）に関する件
- 5) 2011 年（平成 23 年）度予算書（案）に関する件
- 6) 役員改選に関する件
- 7) 第 12 回年次大会に関する件

2011 年 6 月 4 日（土曜日）昭和大学旗の台キャンパスにおいて、危機管理システム研究学会会員総会が開催された。議長長濱昭夫会長のもとで以下の議案が審議の上、承認された。議案 1)、2)については別記の活動報告説明がなされ承認された。議案 4)、5)については内田英二会長から説明があり、承認された。3)については 2010 年度収支決算書の監査報告がなされ、承認された。議案 6)

の役員改選に関する件については議長より会則 13 条、14 条及び 15 条の規定により常任理事、理事、幹事、監事の改選の提案がなされ承認された。議案 7)次回の第 12 回年次大会は、2012 年 6 月 2 日（土曜日）に開催することが決定したが、開催校は東京医科歯科大学で、年次大会長が大川淳氏であることが報告された。



【監査報告】領収書・預貯金通帳・残高との照合のうえ、2009年度の収支決算書は会計帳簿などの記録と一致し、危機管理システム研究学会の収支状況を正しく反映しているものと認めました。

2011年4月28日 幹事 齋藤 淳 ・ 千葉 啓司

監査報告

2010年度の収支決算書は、会計帳簿などの記録と一致し、危機管理システム研究学会の収支状況を正しく示しているものと認めました。

2011年4月28日

監事

齋藤 淳



監事

千葉 啓司



リスク随筆

「行動基準の大切さ～東日本大震災とディズニーランドの危機対応～」

理事 島田公一（YMK・リサーチ・インスティテュート）

先日某民放テレビ局で、東日本大震災発生時のディズニーランドの危機対応を特集した番組が放映された。この番組は、当日の入園者から入手した118分の記録映像と387枚の写真、入園者やスタッフへの取材などからなるドキュメンタリー的な構成であった。

ディズニーランドのある浦安では震度5強。映像ではアトラクションのボートは止まっているが大きく揺れている。またショーを行っている場所では音楽が止まり、ショーが中断されスピーカーの支柱が倒れこんでいく。噴水の池が大きく揺れて水が外にこぼれ出していた。

揺れからわずか40秒で放送が流れ、「皆様にお知らせいたします。ただいま地震がありました。建物のそばにいらっしゃる方は建物から離れて広いところでお待ちください。」と入園者に退避を呼びかけている。

「頭を守ってしゃがんでください。」と身ぶり手ぶりをまじえて指示するスタッフ、ショップのぬ

いぐるみを防災頭巾代わりに配るスタッフ、しゃがんでいる入園者に笑顔でパフォーマンスするスタッフ、寒さに震える入園者にダンボール、ゴミ袋、使い捨て手袋を配るスタッフ、ショップのクッキー、チョコレート、キャンディーズを配るスタッフが映像にあった。

常時1万人いるスタッフの90%はアルバイトだが、震度6強を想定し、なおかつ10万人の入場者がいるときにどうするかが決まっており、その対策を、準備し、訓練をしていたという。防災訓練は年間180回行われ、2日に1回はどこかで訓練が行われている勘定だという。社長を本部長とする地震対策本部も発生から30分で立ち上がったという。当日は出番がなかったが、独自の消防車も2台配備されていた。

アルバイトの女の子へのインタビューでは「ふだんから防災訓練をやっており、お店の中にあるものを使っても良いので、お客様の頭を守ってもらおうという意識がありました。」と答えていた。繰り返し受けている防災訓練で、入園者の安全のためなら誰かの許可を得なければショップの商品を持ち出してはいけないという意識はないのだ。

午後6時を過ぎ、安全確認を終えた屋内施設へ入園者の誘導が開始され、アトラクション内の通路、シアターの座席、レストランの床に待避させた。屋外は気温4にまで冷え込んだが、まだ多くの帰宅困難者が屋内に入れないでブルーシートでサンドイッチ状態になって寒さをしのいでいた。また普段は明かされることのないスタッフ専用通路を誘導されて、1500人の帰宅困難者がディズニー側の施設に案内されていた。交通機関が全面ストップする中、帰宅困難者は2万人、全員が屋内に退避できたのは深夜零時を回っていた。

退避者に配られたのは大豆ひじきご飯。ディズニーランドではこれを非常食として5万人の3~4日間分が備蓄されていたのだ。大豆ひじきご飯はお湯をかければ、50人分の温かい炊き込みご飯ができる非常食だという。

この番組は、「想定外」を口実に対応の不備を言い訳する政府や東京電力の行動と対比して、死傷者や建物など大きな被害はでなかったもののディズニーランドにとっては「想定内」の災害をアルバイトを含めて見事に対応できたことのみを取り上げた、いわば民放特有の番組ではあった。スムーズに行かなかった点やトラブル、震度6強の直下型地震に備えた課題なども取り上げるべきだと思う点はあるものの、実際の映像を見ることができて企業の危機管理上大いに参考になった。

もっともディズニーランドはもともと大地震対策では先進的な企業であった。ディズニーシー建設中の1999年には大震災に備えて、震災があれば施設に損壊がなくても来園者が来なくなるという収益減少と災害時の流動性資金確保のリスクファイナンス対策から、キャットボンド(地震債権)をゴールドマンサックス社を通じて資本市場に発行し対処した。

また、今回震災で駐車場や周辺道路には液状化被害がでているものの、土地改良工事で液状化対策を行っていたディズニーランド本体にはほとんど被害がでてない。

今回の対応で世間から評価されたスタッフの行動を危機管理の観点からみると、番組では紹介されなかったが、ディズニーランドの制定している行動基準「SCSE」の徹底があるのではないかと考えられる。「SCSE」(Safety 安全、Courtesy 礼儀正しさ、Show ショー、Efficiency 効率)はスタッフの判断や行動のよりどころとなる行動基準だ。文字の並びがそのまま優先順位を示しており、「安全」が何よりも優先すべき第一順位にある。こぼれたジュースを拭く清掃担当スタッフは、しゃがまず立ったまま足を使って拭き取る。これは周りに気を取られている入園者が、気づかずにぶつかり転んでしまう可能性を防ぐためであるという。映像で見たアルバイトのスタッフが独自判断でショップのぬいぐるみを配ったのも、こうした行動基準の徹底があったからではないだろうか。

細かい手順のマニュアルより、いざというとき誰もが判断のより所となる大きな行動基準の徹底が重要だと改めて認識した。

お知らせ ～ 「リスク随筆」募集 ～

広報・編集委員会

昨今リスクを強く意識されるニュース・事件が多発しております。こうした状況に対して、当学会でも分科会活動とは別個に本誌を通じて気軽に様々な意見や議論を交わすことが必要ではないかと考えました。

そこで今回「リスク随筆」を企画いたしました。当学会には、それぞれの専門分野の先生のみでなく、実務家の先生方も多数在籍されております。こうした当学会の特徴・強みを大いに活用し、専門分野を超えた意見交換や議論ができれば、有意義な提言が可能であると考えております。つきましては、下記の通りリスク随筆を募集いたします。

リスク随筆の募集要項

テーマ 「リスク」に関連することであれば、何でも結構です。

募集期限 随時

掲載時期 毎号のアリマス・レターにて

投稿要領 A4判1ページ程度

採用可否 広報・編集委員会にて審査上、掲載の可否を判断させていただきます。

応募方法 下記応募先にメールにてご提出ください。

応募先 事務局担当 尼野宛 e-mail:arimass@muh.biglobe.ne.jp

分科会報告

【RMS（リスクマネジメントシステム）研究分科会】

主査：指田 朝久（東京海上日動リスクコンサルティング）

リスクマネジメントシステム研究分科会のRMS分科会の2011年度の研究計画をご紹介します。RMS分科会は2011年は基本的には2010年度の活動を踏まえた活動を継続させていきます。昨年度開催いたしました、「ISO31000研究WG」、「リスクマネジメント事例研究WG」、「ERM研究WG」を引き続き実施します。基本的にはこれらの各WGはそれぞれ2ヶ月 3ヶ月に1回程度のWGを開催し、打ち合わせとメーリングリストの意見交換により研究を進め、年度末には1年間の研究報告書を作成いたします。「ISO31000研究WG」はISO31000の定めた各項目について詳細に研究いたします。現在アカウンタビリティの研究を終了したところで、今回は7月25日（月）にMS&AD基礎研究所で開催します。「リスクマネジメント事例研究WG」は毎回講師の先生をお呼びし様々な分野の事例を研究します、今回は秋口を予定しています。開催場所は法律事務所フロンティアローで行います。「ERM研究WG」はERMと今までのリスクマネジメントとどこが違うのかに着目をし、ERMを推進するための解説書の作成を目指して活動しています。今回は9月12日（月）にプロティビティジャパンで開催します。RMS分科会の各WGにご興味を持ち参加されたいという会員の皆様は事務局にご連絡ください。開催の場所や時間、活動状況など詳しい内容を御説明いたします。新たな参加者を募集しております。お気軽にWGに参加してください。

【リスク事例サロン分科会】

主査 小島 修矢(クエスト コンサルティング ロンドン)

分科会事務局 有賀 平(MS&AD 基礎研究所)

「リスク事例サロン分科会」はマスコミ等で取り上げられた事件や危機事例を題材に、会員間で自由に危機管理・リスクマネジメントの観点から情報交換や意見交流を行うことを目的としています。

本分科会は開催の都度参加者を募り、サロンと言う名前のとおり、飲食しながらテーマに関連して自由に意見交換を行う会費制の分科会です。

今回は、第 52 回の報告をいたします。

第 52 回 (2011 年 5 月 10 日 (火) 午後 6 : 30 ~ 8 : 30、於 東洋経済新報社 9 階会議室)

1. **参加者 (17 名) :** 内田、小山、大野、山本 (祥)、笹子、伊藤 (正)、竹中、丸本、平田、龍崎、能崎、佐藤 (大)、佐藤 (富)、松尾、北澤、小島、有賀 敬称略

2. **テーマ :** 島根原子力発電所における点検時期超過事案に関する事例分析

3. **報告者 :** 樋口 晴彦 氏 (警察大学校警察政策研究センター主任教授)

4. 報告内容骨子

2010 年に中国電力の島根原子力発電所において発覚した点検時期超過事案に関して事例分析を行なった結果、潜在的原因としては、業務負担量と人的資源の乖離、組織文化の過剰性、不適合管理制度の不備及びその他のリスク管理上の問題の 4 点が抽出され、さらに今後の組織不祥事対策に当たっての留意点として、外部に対する過剰反応、協力会社に対する過度の依存心、組織不祥事に関する社員教育の不足の 3 点が認められた。

5. 自由意見・情報交流内容(要旨)

- 現場での解決を優先しようとする意識が強いと、本社部門が問題解決のためのインセンティブをとらなくなるといった傾向がある。
- 現場での解決を重視すると、規定上は安全性に問題があることになったとしても、実質的には問題が発生していない場合に、問題がないものとして対応をする風潮があると思われる。表面的な法令や規則に囚われない姿勢に基本的な問題はないが、行き過ぎるとそれによって発生した組織文化がコンプライアンスを超越した上位規範として作用してしまい、新たな問題が発生する。
- 問題の存在や改善策を見出して報告等を行うと自分の業務が一層多忙になると思い、こうした行動を避けようとする心理が起こる時もある。
- 内部監査や外部監査によるチェックによって問題の発見が促進されるというが、全ての事象をチェックすることはできない。現実には、重要性の高い項目を点検することになるので、重要度の低い事象に関する問題まで発見することは難しい。
- 外部からの評価を気にしすぎるために、本来は必要のない業務を必須業務とってしまう傾向があるのではないか。
- 点検項目や業務はその重要度によって序列をつけるべきだが、すべてを同列とってしまうケースがあり、そういったケースでは、返って重要なことが漏れてしまう危険性が高い。
- 諸外国では、政府は重要なことだけを点検し、それ以外は現場にまかせていると聞く。日本は、すべてを政府が規制しようとしているが、政府が全てを規制することは現実的ではない。それにも関わらず、政府規制を求める声が多く、理解に苦しむ。
- 政府が関与すると不必要な業務が増える傾向にある。特に、点検内容が実情にあっていない場

合には、実質的な点検ができずに形式的な点検に終わってしまう。これでは、本来の目的からは乖離してしまう。

- 安全と規制の関係は継続して検討をしていく必要があるテーマと思う。
- イギリスのローベンス報告では、「自主規制こそ安全は担保される」と言っている。
- 規制については、単に行政に求めるだけではなく、業界等が積極的にその策定に関与していかなくてはならない。
- 技術が進歩しても安全基準は法律ができた時の状況が基礎となっているので法律と現状とが乖離している。乖離は通達等で修正できる場合もあるが、いまさら通達を見直してもらっても困るという声があって法律や通達の変更ができないという話も聞く。
- 機器の場合、経年変化を考えれば「設置基準」と「点検基準」とは本来異なるはずだが、破損していないものを「劣化しているのに交換しないのはおかしい」というおかしい主張がされることがある。
- 点検を必要とする機器が何万という単位になると、全ての機器の破損リスクをゼロにすることは現実ではない。それにも関わらず、「ゼロリスク」を言うが故に実質的な論議が行われていないのではないか。
- 現場を知らない素人がインセンティブをとったために現場が振り回されるケースがあるのではないだろうか。
- 昔はあいまいな知識しか持ち合わせていない人は人前で意見を言わなかった。今は、表面的なことしか理解していない人の意見が蔓延している傾向がある。有識者への信頼が失墜していることも問題だと思う。

【MRM（メディカルリスクマネジメント）分科会】

主査：大川 淳（東京医科歯科大学大学院）

すでに報告しましたように、2011年6月15日に、分科会の5年間の成果物である、「あなたの医療は安全か？異業種に学ぶリスクマネジメント」が、医学書の老舗である南山堂から出版されました(表紙参照)。危機管理システム研究会メディカルリスクマネジメント分科会編となり、寺本、大川、内田を中心にして、新旧メンバー15名の協同執筆です。

医療安全を医療人以外の立場から見直す、という基本的なコンセプトはあったものの、細かい部分でのすり合わせはなかなか難しく、各人の原稿に対して医師である3人が繰り返し修正を求めるという形で進め、出版社が決まってから完成まで1年以上かかりました。しかし、どの章をとっても事務経験の豊富なメンバーが執筆していますので、従来の医療安全の書籍とは一線を画す内容となっています。また、読者のターゲットを医師におきましたが、医療者以外の方にとっても、我が国の医療安全の流れを俯瞰し、残された課題について理解を深めることができるものと信じています。医療安全に興味のあるアリマスメンバーには是非お読みいただきたく思いま

あなたの医療は安全か？

異業種から学ぶリスクマネジメント

危機管理システム研究会
メディカルリスクマネジメント分科会 編



す。

今後のMRM活動は原点に戻り、隔月のペースでテーマを決めて討議を進めていく予定です。詳細につきましては、下記にお問い合わせください。

主査 東京医科歯科大学 大川淳

連絡先 okawa.orth@tmd.ac.jp

【企業活性化研究分科会】

主査：山本 洋信（アップライフシステム研究所）

<第三十九回 2011年3月12日(土)時間:13:30~15:00 於：専修大学(神田校舎)>

1. 参加者：井端、大野、菅原、杉本、高市、千葉、宮川、山本、依田、渡邊、

2. テーマ：企業活性化に関する研究

3. 発表内容 テーマ：粉飾企業の分析

・報告者：高市幸男 ・配布資料：14枚

・内容要旨：本報告は、株式会社アルデプロ(以下、「同社」という。)の粉飾について分析したものである。同社は、社宅、マンション、ビル等の不動産再活事業を展開する企業で、平成16年3月に東証マザーズに上場した。同社を取り巻く経営環境はサブプライムローン問題が顕在化し、外国資本投資ファンドが国内の不動産事業から撤退、住宅価格の値上がりによる消費者の買い控え、また金融機関による不動産業者向け融資姿勢が慎重になり厳しい状況に陥り、急激に悪化した。そのなか同社は、過去の決算における一部の営業取引について会計処理の修正を要する事象が判明した。その後同社は、証券取引等監視委員会から、有価証券報告書の虚偽記載により法令違反を言い渡された。

本分析では、まず訂正前の連結財務諸表から財務数値の推移や傾向を概観し、粉飾内容を分析した。次に、井端和男の分析法をもとにリスク測定と似非成長企業のチェックをおこなった。最後に、企業文化や経営者の資質などの定性要因から粉飾の背景や目的を検討した。本報告によれば、同社は平成18年度からの売上の過大計上、架空売上の計上、引当金の不計上により粉飾経理をおこない、経常損益や当期純損益数値の改ざん及び虚偽報告、また平成20年度では棚卸資産の過大計上により債務超過であったことを改ざん及び虚偽報告した。同社の粉飾は同社の体質やコーポレート・ガバナンスの問題、そして経営者の資質問題から多くの影響をうけていると推察した。

4. 発表内容 テーマ：「年次大会報告」についての再検討

『米ビック3のコーポレート・ガバナンス~長期でみた過去の変遷、その特徴と評価』

・報告者：依田光広 ・配布資料：9枚

・内容要旨：本報告は、米国自動車メーカーのビック3におけるコーポレート・ガバナンスを、過去から現在までの長期的観点でその変遷や特徴をまとめたものである。本報告では米ビック3のコーポレート・ガバナンスを検討し、日本におけるコーポレート・ガバナンスのあり方を考察した。

(文責:宮川宏)

当日は、前日11日の大震災により交通機関がマヒ状態であったにも係らず多くの出席があった。片道で3時間30分費やした会員もみられた。特筆させて頂く。また、帰宅の交通機関の状況の

関係から、担当者による報告準備もなされていた未訳英論文の翻訳を次回に報告していただくこととした。
(主査:山本洋信)

(注) 4月23日に予定されていた第40回の分科会は、会場をお借りしている大学側の都合で使用不可となり、休会として5月に延期した。

<第四十回 2011年5月21日(土)時間:13:30~17:00 於:専修大学(神田校舎)>

1. 参加者:井端、魚谷、大野、木村、小林、斎藤、柴山、杉本、千葉、長井、星野、山本、渡邊

2. テーマ:企業活性化に関する研究

3. 発表内容 テーマ 『“ Learning the wrong lessons from history :Underestimating strategic in business turnarounds ” by Andrew M.Wild』

上記、未訳論文の翻訳および検討

・報告者:千葉啓司 ・配布資料:7枚

4. 発表内容 テーマ 粉飾企業の分析

・報告者:星野敏之 ・配布資料:7枚

・内容要旨:本報告は、株式会社ビクター(以下「同社」という)の粉飾について分析したものである。同社は、映像機器、音響機器、記録メディア事業を展開している企業であり、平成19年8月に株式会社ケンウッドが資本参加し、その後平成20年10月に経営統合した。同社の粉飾は、経営統合以前から不適切な会計処理があることが発覚し、平成22年6月に金融庁により課徴金納付を命じられた。

本分析では、財務数値の推移、収益性分析、リスク対象額とリスク累計額の分析を試みた。加えて、同社は多くの連結子会社を有していることや株式会社ケンウッドとの経営統合を行っていることから、連単倍率に着目し、同社が実行した戦略とそれにと伴う財務数値への影響についての分析も試みた。本分析によると、連結及び個別財務諸表による収益性分析を行い、ROE, EOL, M, Tなどの各値を検討した結果、収益性の低下が見られた。さらに、各連単倍率の推移から、子会社の収益が低下していたと推測し、また構造改革に伴う企業の統廃合、従業員のリストラ等の縮小戦略と組織変更等の復帰戦略の組み合わせを実行してきたと推察した。その他に、同社は減損損失の不計上、費用や引当金の過少計上による粉飾経理を行い、当期純損益の数値を改ざん及び虚偽報告した。同社の不適切な会計処理は、生産効率や利益率の低下に伴った事業再建の困難性が背景にあると考察した。

5. 発表内容 テーマ 年次大会報告者の検討

「企業のリスク管理と内部留保について」

・報告者:井端和男 ・配布資料:7枚

(文責:斎藤幸男)

【価値ベース・リスクマネジメント研究分科会】

主査:藤江俊彦(千葉商科大学)

当該期間は諸般の事情により活動を行っておらず、特筆すべき報告はございません。

学会員の学位・論文・新刊書のご紹介

著書名：内部統制評価にみる「重要な欠陥」の判断実務

会員名：南 成人（ミナミ ナルヒト）

企業活性化研究分科会所属

（仰星監査法人 副理事長・東京事務所長）

内 容：近年の上場基準の緩和により、以前ではむづかしいとされた比較的の小規模の会社でも上場が可能になったためか、常識では考えられない会社不祥事も発生している。本著は内部統制報告制度の実務に係る内部担当者や公認会計士を対象として、実務上の指針

や考え方を事例分析を踏まえて提起している。本著は著者が所属する監査法人と系列のコンサルタント会社の共同開発による『北斗メソッド』がベースとなっていると一言断られているが、規模の大小にかかわらず外部から会社の内部統制体制への風当たりは益々強くなっていくことが予想される折、著者が提起した一つの基準を学ぶことで持続的発展をもくろむ企業のリスク対応の質を高める研究ができよう。

著者略歴：立命館大学経済学部卒業、監査法人朝日親和会計社(現あずさ監査法人)を経て、東京赤坂監査法人(現仰星監査法人)に入所、公認会計士・IT コーディネータ、現在、同法人副理事長・東京事務所長

主な著書：スタンダードテキスト監査論(共著)、減損会計の会計実務・税務実務・監査実務(共著)、誰でも使えるデジタル国税六法 TAX Navigator (共著)、IT コーディネータ試験&研修 合格の秘訣(共著)、小売業のIT 投資・活用成功事例集(共著)など多数



出版社	中央経済社	単行本	378ページ	発売日	2010/4/30
ISBN-10	4502228907	ISBN-13:	9784502228902	価格	4200+税

著書名：企業の法的リスクマネジメント（神戸学院大学法学研究叢書）

会員名：赤堀 勝彦（神戸学院大学）

内 容：厳しい環境下での経営を余儀なくされている企業。内部統制、個人情報漏洩、製造物責任、環境法規制、メンタルヘルスに関わる最近の企業リスクとリスクマネジメントについて論述する。

著者略歴：1964年3月早稲田大学商学部卒業。1964年4月日本火災海上保険株式会社(現日本興亜損害保険株式会社)入社。ニューヨーク駐在員事務所長、能力開発部主管等を経て、2002年4月長崎県立大学経済学部教授。2007年4月長崎県立大学名誉教授、神戸学院大学法学部教授

主な著書：『リスクマネジメントと保険の基礎』(経済法令研究会、2003年)、『最近のリスクマネジメントと保険の展開』(ゆりり書房、2005年)、『企業リスクマネジメントの理論と実践』(三光、2008年)、『ライフキャリア・デザイン—自分らしい人生を送るためのリスクマネジメント—』(三光、2011年) 他



出版社	法律文化社	単行本	310ページ	発売日	2010/08
ISBN-10	4589032759	ISBN-13:	978-4589032751	価格	5,200円 + 税

【編集後記】

第11回年次大会も無事終了し、内田英二会長の下に新体制が発足しました。我が広報・編集委員会も現体制で2期目に入り新たな目標を掲げて進んでゆくこととなります。この内最も重要なのは、IT技術の著しい発展に伴いますます重要となるホームページ(HP)の位置づけです。既に昨年12月より、本アリマス・レターは印刷・郵送方式を廃止し、HP上での掲載をご通知する方式を採用させて頂きました。この結果、掲載する情報量を増やせたり、カラー写真の採用など紙面の充実が一定程度図られると同時に印刷・郵送コストの大幅な削減が達成されました。また東日本大震災に対する当学会の取組情報などトップ画面の改善も試みています。尚現在、HP強化・改善を本格的に成し遂げるべく、当委員会の下に「HP強化・改善部会」を立ち上げ、主として各分科会を通じて会員諸氏のご要望・ご意見を広く募り、今年度中にも抜本的改訂を行う所存です。

紫陽花の雫は澄んだ涙の滴 大震災の悲しみが少しでも癒されんことを祈ります。

(広報・編集委員長 小島 修矢)

<事務局からのお知らせ>

1. 分科会連絡先

教育実践分科会

主査：後藤 和廣

.03-3291-8921 / Fax. 3291-8930

e-mail: gotokaz@aol.com

リスクマネジメントシステム研究分科会

主査：指田 朝久

. 03-5288-6584(直) / Fax. 03-5288-6590

e-mail: t.sashida@tokiorisk.co.jp

リスク事例サロン分科会

主査：小島 修矢

Tel: 047-338-6185 / Fax. 047-338-6185

e-mail: kojimash@mb.infoweb.ne.jp

メディカルリスクマネジメント分科会

主査：大川 淳

.03-5803-4513 / FAX 03-5803-4513

e-mail: okawa.merd@tmd.ac.jp

企業活性化研究分科会

主査：山本 洋信

. 048-874-4491/FAX 048-874-4491

e-mail: -

価値ベース・リスクマネジメント研究分科会

主査：藤江 俊彦

. 047-372-4111/FAX047-373-9919

e-mail: fujie@cuc.ac.jp

2. 新入会員紹介

氏名	所属
青淵 正幸	立教大学

3. 住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更の生じた場合には変更前と変更後を並記のうえ必ず文書・メールにて事務局宛にご連絡ください。

発行 危機管理システム研究学会

〒140-0013 東京都品川区南大井 6-3-7

スリージェ南大井ビル (株)リムライン内

. 03-5753-0080 FAX. 03-5753-0086

e-mail : arimass@muh.biglobe.ne.jp

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~arimass/>

2011年6月20日 発行